かに話を聞いてもらえず、心の寂しさや苦しさを誰にも言えず、一人で悩んでいたのかもしれません。

もし、そんなときに「大丈夫？」「話してもいいよ」と優しく声をかけてくれる人がそばにいたら。誰もが、「誰かのために行動すること」ができて、支え合うことができたら、生きづらさを感じる人がいなくなるのではないかと私は思います。

私は、あの一ヶ月間の経験を一生忘れないと思います。言葉で通じることができなくても、心では通じることができます。優しさや思いやりは、どんな国の人にも届きます。そして、自分の行動が、誰かの笑顔や安心につながることもあると思います。

これから私は、まわりの人に目を向けて、困っている人がいたら勇気を出して声をかけてあげられる人になりたいです。たとえ小さなことでも、「誰かのために行動すること」を大切にして生きていきたいです。そんな優しさが少しずつ広がっていけば、きっと社会はもっと明るくなると、私は信じています。

ロケットストーブから学んだこと

高槻市立阿武野中学校　2年
池田　穂輝さん

ある日、たまたま出かけたショッピングモールで「矯正展」という催しが開かれていました。

「ここの商品は全て刑務所の人たちが作ったんだよ。綺麗な仕上がりだね。」と言いながら母はひとつひとつを手に取ってゆっくり見ていました。そして父が小型のロケットストーブを買いました。僕は心の中で「なんでこんな物を買うんだろう」と思いました。正直、刑務所で作ったものと聞くと、少し怖い気持ちもあり、関わりたくないと思ったのです。でも、その気持ちを父には言えませんでした。

後日、父と二人でキャンプに行き、そのロケットストーブを持っていきました。火をつけるとゴーッと音を立てて勢いよく燃え出し僕が薪を入れるとお湯がぐらぐらと沸きました。そのお湯を父と一緒に飲んだとき、思っていた以上にしっかりした作りにおどろきました。そしてやっと、気になっていたことを父に聞くことができました。

「どうしてこのストーブを買ったの？」

父は少し笑いながら話してくれました。

「刑務所作業品は受刑者の人たちが社会に戻るための訓練として、一生懸命に作ってても、売り上げの一部は犯罪で苦しむ人たちの支援にも使われているんだよ。人は誰でも失敗することがあるよな。でも、立ち直ろうとする人を応援できる社会でなければならない。だからこういうものを買うことはその人たちを応援することにもなると思うんだよ。」

「う、うん･･･。」

僕はそれ以上何も言葉が出てきませんでした。そして自分の偏見を恥ずかしく思い反省しました。そのとき父はにっこり笑い、熱い熱いお湯で「乾杯！」をしてくれました。僕の気持ちを理解してくれたのだと思うと、認められたような、大人になったような、背筋が伸びるような嬉しさが込み上げました。

この経験から、僕はクラスの代議員としても、注意するだけではなく、困っている人や不安を抱えている人に目を向けることの大切さに気づきました。実際に、自転車のカギをなくして困っていた友達や、部活で使うタオルをなくして不安そうにしていた友達と一緒に探すことができました。そのとき、安心した笑顔を見て僕自身もうれしくなりました。

「社会を明るくする運動」は、犯罪や非行をなくし、誰もが安心して暮らせる社会をつくる取り組みです。父との話で学んだことは特別な人だけでなく、僕たち一人ひとりができる小さな行動でも社会を明るくしていくことができるということです。

これからも僕は、父に認めてもらったときのような背筋が伸びる気持ちを忘れず、偏見を持たずに相手を理解し、クラスでも社会でも人を支えられる存在でありたいと思います。そして、犯罪や非行のない、安心して暮らせる社会を目指して、自分にできることを一つずつ積み重ねていきたいです。

“社会を明るくする運動”大阪府推進委員会
マスコットキャラクター　アカルイーネ

明るく見守るイメージでヒマワリとハートをあしらい、芽生えた双葉で立ち直りを願って描かれました。

第75回“社会を明るくする運動”作文コンテストには、8,805人の小学生と、16,176人の中学生が大阪府推進委員会に作品を寄せてくれました。

その中から、小学生の3作品と中学生の3作品を「ひまわり奨励賞」として表彰いたしました。

参加されたすべての小学生・中学生ほか関係各位の皆さまに対し、心から御礼申し上げます。

第75回“社会を明るくする運動”
大阪府推進委員会事務局

▼“社会を明るくする運動”作文コンテスト特設ウェブサイト
https://www.moj.go.jp/hogo1/kouseihogoshinkou/syamei/activity/essay/index.html

右のQRコードから
特設ウェブサイトに
アクセスしてね！

第７５回“社会を明るくする運動”作文コンテスト ひまわり奨励賞作品集

第75回“社会を明るくする運動”
大阪府推進委員会

小学生の部

人と人とをつなぐ大切な言葉

枚方市立殿山第二小学校　6年
寺東　陸さん

「いつも、ありがとうな」よくおじいちゃんがぼくにかけてくれた言葉だ。休日になると毎週お父さん、お母さんと一人暮らしをしているおじいちゃんの家に行き、スーパーへ必ず行っていた。そして、いつものように車椅子を押し、おじいちゃんの買い物を手伝った。足腰が悪いおじいちゃんからすれば、とても嬉しかったのかもしれない。時には、「えらいわね～」と声をかけてくれる人もいた。これは、ぼくが小学二年生の頃の思い出だ。おじいちゃんはもういないけれど、おじいちゃんが言ってくれた「ありがとうな」が忘れられないし、嬉しくなる。だから今も困っている人がいる時は、ぼくが出来ることはお手伝いをしようと思っている。「ありがとう」と言うのも「ありがとう」と言われるのもぼくはどちらも好きだ。

この「ありがとう」という思いを伝えたい人たちが身近にいる。朝、通学路に立ってくれている地域の見守りボランティアの人たちだ。毎日「おはよう」「いってらっしゃい」と言葉をかけてもらうと安心して登校できる。もし自分たちだけで登校していたら事故や犯罪に巻き込まれたりしないかと不安な気持ちになるし、自分たち上級生が下級生に注意することが格段に増えて、その負担はとても大きい気がする。感謝の気持ちでいっぱいだ。誰かのために行動出来ることは素晴らしいし、日常のちょっとした人と人とのつながりが犯罪や非行を防ぐことになるのではないかと思う。毎日立ってくれているからぼくにとって顔見知りのいざというときに相談出来る大切な人たちだ。そして、この地域の人たちの温かい気持ちは、おじいちゃんとの思い出につながっていくのだ。それは、大切な人のためにぼくが出来ることは協力していきたいという気持ちだ。

今、日々流れるニュースの中には、ぎゃく待やいじめ、せっ取や詐欺など悲しいニュースであふれている。またそこにインターネットがからんだ犯罪がとても増えている。もっと身近な人に相談することが出来なかったのだろうかと切ない気持ちになる。改めて家族や信頼出来る友だちがとても大切だと思う。そして、地域の中に顔見知りの人がいることはおたがいのことを気づかえる社会になるのではないか。「おはよう」「いってきます」「ありがとう」こうした言葉はとても短い言葉だけど人と人とをつなぐ大切な言葉だと思う。おじいちゃんからかけてもらったあの温かい「ありがとうな」の言葉はこれからも忘れることはないだろう。

この「社会を明るくする運動」は自分が出来る、または、成しとげられることから一歩ずつ進めていくことが大事だと考える。なぜなら人から押しつけられたり、命令されたりしたことは反発したり、けなしたり、批判したりすることで終わってしまうからだ。だからこそ、おたがいを尊重し、助け合って進めることで笑顔であふれている街、社会づくりを目指していきたい。

私たちの選択

堺市立原山ひかり小学校　6年
道古　楓花さん

「犯罪がこの世から無くなればいいのに」

世界の大多数の人が思っているであろうこと。流れてくるニュースで個人的に犯罪についても考える機会が増えていたそんな時、この作文をかくことになり、自分の経験を元に犯罪や非行をした人の立ち直りについて改めて考えてみることにした。私も、自分の中では大きな過ちを犯してしまった事があったからだ。その過ちのせいで私は重く苦しむことになり、そのとき多くのものを失ってしまった。

皆さんは犯罪や非行をした人を、怖い、関わりたくないと思うだろうか。それはやってしまったことの大きさにもよるが、大きい小さいに関わらず、大多数の人がそういった感情を抱くだろう。私が過ちを犯してしまったときも、一部の人から避けられ、これまで築いてきた友情関係などが崩れてしまった。一度でも壊れてしまったものは、絶対に元に戻すことは出来ないということを痛いほど分からされた。少し時間が経つと、すごく後悔し、本当に反省した。でももう遅く、どうすればいいかわからず追い詰められて、その時期私は人間関係にひどく悩み、一人で抱え込んでしまっていた。家族にも話す事ができなかった。勇気が出なかったこともあるが、何より、元々悪いのは私だったからだ。元は自分のせいなのに、助けを求めていいのか、苦しいと声を上げていいのか、泣いていいのか、分からなかった。周りから見ればくだらない小さいことかもしれないけれど、あの時の私に見えていた小さな世界の中ではすごく大きなことだったのだ。実際に私の学校生活にも大きな影響を及ぼした。

「何か悩んでいる事があったら言ってね」

両親に何回もかけられた言葉。心配をかけてしまっているな、と申し訳なくなってしまっていた。このことを母親に話す事ができたのは最近のことだった。頷きながら最後まで話を聞いてくれて、話が終わった後、

「それはやっちゃいけないことだったけど、大切なのは、今自分がどう思っているかだよ。反省してるんでしょ？変わろうと努力していれば、周りの人もきっとわかってくれるから。」

そう言ってくれた。心の中にかかっていたモヤがすうっと晴れた気がした。勇気を出してよかった、聞いてくれる人がいてよかった、その時すごく安心して、やっぱり、誰かに話すべきなんだ。そう思った。

「ちゃんと嫌って言っていいと思う。」
六年生の時、私が友達にかけた言葉だった。その友達は周りの人たちから、昔にやってしまったことのせいで少しイヤなあだ名をつけられていて、その子は笑ってやり過ごしていたけど、私の目には無理して笑っているようにしか見えなかった。だから私は恐る恐るその子に言ってみた。
「・・・間違ってたらごめんだけど、嫌なんだったら、ちゃんと嫌って言ってもいいと思うよ。勇気が出ないなら、話聞くから」
するとその友達は、少し話をしてくれた。「話聞いてくれてありがとう。なんか勇気出たかも、ほんとありがと！」と元気に笑いかけてくれたその瞬間、自分のことを思い出した。話を聞いてもらえることはやっぱり安心するんだなと、もう一度思った。その時、声をかけるのはすごく緊張したけど、この一言で少しでも救われてくれるなら、何度でも声をかけ続けたいなと自分は思った。

これらの経験から、犯罪や非行をした人が立ち直るために必要なのは、「話を聞いてくれる人」「受け入れてくれる環境」なんじゃないかと思った。犯罪や非行をしてしまった人がどれだけ後悔し、反省していて、変わろうと努力していても、周りの人達が突き放してばかりだと変わりたくても変わることは絶対にできない。私達周りの人の対応で犯罪や非行をした人が変わる事ができるかが決まるのだ。罪を犯した人の中にも、やり直したい、反省している、という人はたくさんいるだろう。それでやってしまったことが許されるわけでは決してないが、その気持ちがあるなら、私たちは受け入れ、支えていくべきだと私は思う。本当に反省している人とそうでない人の区別をつけるのは難しいが、その人の過去を見て突き放すのではなく、一度、その人の「今」を見て欲しい。私達がどう対応するか、どんな言葉をかけるかによって、その人の未来が大きく変わると私は思う。犯罪や非行をした人を許して欲しいとは言わないが、その人をしっかり見て欲しい。偏見ではなく、その人の今の気持ちに寄り添い声を聴いてあげて欲しい。綺麗事は言えないが、私はこの考えをずっと抱えて生きていく。

犯罪や非行をした人を軽蔑し、批判し続けるのか、犯罪や非行をした人の声に耳を傾け、やり直そうとしている人を支えてゆくのか。皆さんなら、どの選択をしますか？

安心して生活できる社会をめざして
～僕らは一人じゃない～

堺市立浜寺東小学校　6年
和田　拓真さん

社会を明るくするためには、一体何が必要なのか。みんなが安心して生活できる社会をつくるには、どうすればよいのだろう。みんな考え方も生活環境もまるで違う人どうしが信頼しあい、相手を思いやり認め合い協力すること、支え合うことだと思うけれどとてもむずかしい事にしか思えなかった。しかし、学校での出来事で僕は気づきはじめた。

僕は、休み時間にそうじをしている。始まりは小学五年生の時の休み時間だった。その日は、どんよりとしていて、朝から雨が降り続いていた。ふと目に入った廊下が、とてもうす暗く見えた。僕は友達に、
「一緒にそうじをしよう。」
と声をかけた。すると友達は、快く受け入れてくれた。廊下がだんだんきれいになると、なんだか心が軽くなったような気がした。

「そうじをしたら、心もきれいになるんだ。」
と気づいた僕は、その日から廊下のそうじを続けるようになった。時には教室。教科書やノート、国語辞典も乱雑に置かれているより、並べて整えるだけでもすっきりした気持ちになった。ある日、普段はあまり話さないクラスメイトから、
「いつもそうじをしてくれてありがとう。」
と言われた。そして、たった三人で始まったそうじは、他の友達にも広がった。いつしかそうじの範囲も廊下から階段、玄関へと拡大していった。僕の想像を超えて広まっていったのはなぜだろう。もしかしたらそうじは、みんなの心までも明るく、晴れやかにしているのかもしれない。

始めの頃は、まだそうじが終わらずに休み時間までそうじを続けていると誤解していた先生も応援し、手伝ってくれる先生までいた。

小学六年生になった今も、日課のように休み時間のそうじを続けている。児童集会で、校長先生に紹介されることもあった。僕は、すごい事をしているとは思っていない。ただ、一緒にそうじをしてくれる友達や、共感してくれる友達がいることがうれしいし、楽しいから続けられているんだ。

最近、そうじをする場所のアンケートをとったりして、普段話をしない子にも参加してもらえるように工夫した。するとたくさんの声が届いた。驚いた。こんなに大勢の人が共感してくれるということに。

そうじを通して、コミュニケーションが生まれ、いろんなことを話すようになったクラスメイト、友達から友達へとつながり協力してそうじができたこと、その一つ一つの出来事が僕にとってとても大切なものになっていた。

「信頼し合い、相手を思いやり認め合い協力すること、支え合うこと」は、僕にはとてもむずかしくてできそうにないと思っていたことだけれども、一生けん命がんばっている姿がみんなに伝わっていた。

社会を明るくする目標に向かって一歩前に進み出すことや、困って立ち止まった時には、話を聞いてくれる仲間がいることの素晴らしさを、僕は身をもって感じることができた。

そして、思った。僕らは一人じゃない。

"社会を明るくする運動"
大阪府推進委員会マスコットキャラクター
アカルイーネ

中学生の部

「見えない絆」がつくる安心社会

大阪市立北稜中学校　3年
楼　梦珂さん

日本に来て驚いたのは、人々が自然に守っている「暗黙のルール」の多さです。電車で黙って並ぶこと、公共の場でゴミを捨てないこと、見知らぬ人にも丁寧に接することなど。最初は窮屈に感じましたが、今ではこれこそが日本社会の安全と安心を支えていると実感しています。特に外国人の目から見ると、この「見えない絆」の大切さがよくわかります。

初めてゴミ出しをした時、分別方法が分からず困惑していました。すると隣に住むおばあさんが「留学生の方ですか。」と声をかけ、分別の仕方を丁寧に教えてくれました。それ以来、彼女は時々「この包装は燃えるゴミですよ。」と教えてくれます。このような地域の見守りが、ルールを守る意識を自然に育ててくれるのだと実感しました。

国語の授業で、私はある忘れられない経験をしました。ある朝、急いで家を出たため、大切なノートを忘れてしまったのです。授業が始まる直前、焦っている私に気づいた隣の席のクラスメートが「一緒に見よう。」と自分のノートを差し出してくれました。ノートにはふりがなと分かりやすい例文が書かれており、とてもわかりやすいです。この出来事以来、私たちは仲間になり、今では転校生にも同じようにノートを貸すようになりました。この連鎖が教室全体に広がり、今では誰かが困っていると自然に手を差し伸べる雰囲気が生まれています。

ある日、道に迷って途方に暮れていた時、近くにいた女性が声をかけてくれました。私の拙い日本語を一生懸命聞いてくれて、目的地まで連れて行ってくれたのです。その時、たとえ言葉が不自由でも、優しさは通じると実感しました。これらの体験から、私は「優しさの連鎖」が社会を変える力に気付きました。

おばあさんのゴミ分別指導から始まり、クラスメートのノート共有、女性が目的地へ導くなど。一見小さな行為も、受け取った人が次の人へと繋げることで、大きな安心のネットワークが生まれます。特に留学生という立場で感じるのは、この連鎖が「異なる文化の人々」も包み込む力です。母国では「他人に干渉しない」文化でしたが、今では「声をかける勇気」こそが、誰もが孤立しない社会の基盤だと思うようになりました。

日本社会から学んだのは、安全で明るい社会を作るのは、厳しい罰則ではなく、人と人とのつながりだということです。留学生の私でも、挨拶をする、困っている人に声をかけるといった小さな行動で、この「見えない絆」を強くすることができます。

日本で体験した「優しさの連鎖」は、単なる習慣ではなく、人間同士が互いを尊重し合う生き方そのものです。小さな親切が世界中に広がれば、きっと誰もが笑顔で暮らせる社会が実現するでしょう。

母国に帰っても、日本で学んだこの「支え合いの心」を伝えていきたいです。一人ひとりに目を向け、小さな親切を積み重ねることで、どんな国でも安心して暮らせる社会が作れると信じています。

誰もが誰かのために

大阪市立豊崎中学校　1年
石村　凛さん

「ねえ、この子のお世話、お願いできるかな？」

小学一年生の春。クラスが始まってすぐのころ、担任の先生にそう声をかけられました。私のとなりの席になったのは、ドイツから日本に来たばかりの女の子でした。髪や目の色も違い、日本語もほとんど話せないようでした。その時は「私にできるかな？」と少し不安に思いながらも、「うん、いいよ」と軽い気持ちで引き受けました。

最初は、教科書を見せたり、学校の場所を教えてあげたりするぐらいでした。しかし、うまく通じないときもあって、どう接していいか分からず、正直困ってしまうこともありました。けれど、ある時、目が合ったときにその子が小さく笑ってくれました。そして、ほんの少しだけど「ありがとう」と言ってくれたのです。発音はたどたどしかったけれど、その一言が私の心にまっすぐ届きました。私はそのとき、「誰かのために行動すること」がこんなにも嬉しく、あたたかい気持ちになるものだと初めて知りました。その日から私は、その子との時間をとても大切に思うようになりました。言葉が通じなくても、笑顔や仕草で伝え合うことができると分かり、少しずつ仲良くなっていきました。

ところが、その子は日本にずっといるわけではなく、たった一ヶ月ほどでまた帰国してしまうことになっていました。短い時間でしたが、私たちは毎日いっしょに過ごし、笑い合い、支え合いました。気づけばその子は、ただ「お世話する相手」ではなく、私にとって「大切な友達」になっていたのです。

帰国の前の日、私はその子と手をつないで帰りました。うまくお別れの言葉は言えなかったけれど、ぎゅっと手をにぎり返してくれたことを、今でもよく覚えています。後日、お母さんが「先生がね、『この子のお世話は、凛ちゃんにしか任せられない』って言ってたよ」と教えてくれました。

私はとても驚き、そして心からうれしく思いました。私がしたことは小さなことです。けれど、それを見ていてくれる人がいて、誰かの力になれていました。そのことが私は誇らしく思いました。

この出来事を通して、私は「誰かのために行動すること」が、自分も相手の心もあたたかくしてくれるものだと気づきました。そして、優しさや思いやりは、たとえ短い時間でも、人と人の間に深い絆をつくる力があるのだと思いました。

けれど、私たちの現在の社会では、そんな優しさや思いやりが十分ではないと感じることもあります。ニュースではいじめや非行、犯罪の話題がくり返し報じられています。特に、中学生や高校生など、年齢が近い人たちが事件に関わっていることを知ると、とても胸が痛みます。きっと、そういう人たちも、はじめから悪いことをしたかったわけではないはずです。誰